現代短歌分類辞典

第五卷

津端　修編纂

津端　修編集

現代短歌分類辞典

第五巻

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

イソラベラ社

現代短歌分類辞典

5

昭和二十九年三月十日初版発行
昭和四十二年四月十日再版発行
定価四四〇円

著者兼発行印刷者　津端　修

東京都中野区上高田二丁目九ノ一六
発行所　イソラベラ社
電話三八七局八四二九番
振替　東京　六七三四一番

目次

		歌數	頁數
あかるく	①	三二〇	一
〃 結句止	②	三〇	二七
〃 隔語修飾	③	七〇	三〇
〃 中止法	④	八六	三六
あかるくーし		三	四四
あかるくーして		四	〃
あかるくーぞ		一	四五
あかるくーて		四四	〃
あかるくーも		二六	四九
あかるぐるし		一	五一
あかるけく		一	〃
あかるけーど		六	五二
あかるけれ		二四	〃
あかるさ 結句止	①	一二三	五五
あかるさ	②	一九三	六五
あかるし 結句止	①	一〇三	八一
〃 終止形	②	一八七	九〇
あかるすぎ		一	一〇六
あかるすぎ たり		一	〃
あかるすぎーたる		三	〃
あかるすぎる		三	一〇七
あかるたへ		三	〃
あかるーなり		四	一〇八
あがるーなるーべし		一	〃
あかるーのみ		二	一〇九
あかるまーむ		一	〃
あかるみ 名詞	①	五六	〃
〃 中止法	②	一六	一一四

	歌數	頁數
あかるみ　連用形　③	一五	一一六
あかるみーし	二	一一七
あかるみそめ！て	一	一一八
あかるみそめーぬ	一	〃
あかるみーて	二〇	〃
あかるみーぬ	二	一二〇
あかるむ　終止形　①	一七	〃
〃　連体形　②	六四	一二二
あかるめ！ど	一	一二七
あかるめーば	六	一二八
あかるめーり	一一	〃
あかるめーる	六	一二九
あかるーめれ	一	一三〇
あがるーも	二	一三一
あかるーらし	二	〃
あがるーらし　①	五	〃
〃　②	一	一三二

	歌數	頁數
あかれ	一	一三二
あがれ	七	一三三
あがれーど	三	〃
あかれーども	一	一三四
あかーれーぬ	一	〃
あがれーば　①	三	一三五
〃　②	八	〃
〃　③	一	一三六
〃　④	三	〃
あかれーり	五	〃
あがれーり　①	三九	一三七
〃　②	一	一四一
あかれーる	一三	〃
あがれーる　①	一	一四二
〃　②	二五	一四三
あかれんぐわ	五	一四五
あかろき	一	一四六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あかゐ　七　一四六
赤井嶽　一　一四七
赤緒　七　〃
閼伽　一　一四八
阿寒川　一　〃
阿寒湖　四　〃
アカンサス　四　一四九
阿寒岳　一七　〃
阿寒野　一　一五一
あかんべ　一　〃
あかんぼ　二一　一五二
秋——結句止　六一　一五四
——あさき　一四　一五九
——あつき　一四　一六〇
——あつし　四　一六二
——いたる　一　〃
——いたる　二　〃
①
②

——おそき　三　一六三
——おそく　二　〃
——か　四　一六四
——が　七　〃
——かな　二六　一六五
——かも　七　一六七
——きたる　八　一六八
——きたる——らし　四　一六九
——き——ぬ　六　〃
——く　三　一七〇
——くる　四　〃
——くるる　二　一七一
——くれ——て　二　〃
——くれ——ど　二　〃
——くれ——ば　二二　一七二
——くれ——む　と——す　八　一七四
——こそ　三　一七五

	歌數	頁數
―さびし	四	一七五
―さびーて	三	一七六
―さむき	八	〃
―さむく	三	一七七
―さむし	八	一七八
―さむみ	三	〃
―さらーば	二	一七九
―さりーし	二	〃
―さりーて	六	〃
―さりーにーけり	八	一八〇
―さる	二	一八一
―されーば	一二	〃
―し	二	一八三
―すでに	一二	〃
―すみーて	三	一八四
―ずむ	三	一八五
―すめる	三	一八五
―ぞ	七	一八六
―たかき	五	〃
―たけーし	四	一八七
―たけーて	一一	〃
―たけーにーけり	六	一八八
―たちーし	五	一八九
―たちーにーけり	一四	一九〇
―たちーぬ	二	一九一
―たつ	五	一九二
―ちかき	一七	〃
―ちかし	四	一九四
―ちかづきーぬ	二	〃
―つぐる	二	一九五
―と	九二	〃
―とは	四	二〇三
―とーも	三	〃

―なり	一五	二〇四
―なる	九	二〇五
―なれ―ば	六	二〇六
―なれ―や	三	二〇七
―に	八九	〃
―に―し	四	二一五
―に―して	七	〃
―の―連体修飾語	一、一一四	二一六
合計	三、三七六	

あかるく ①【形容詞】

ク活用「あかるし」の連用形。

アカシヤの繁り明るくしづもりて昼の旅順の街は寂しも　影山正治

曉に篠をつく雨はとざざざる温泉宿明るく直降りに見ゆ　吉植庄亮

曉の手もと明るくなりくれば稲扱機械踏みはじめたり　吉原義修

曉の寝起に温泉にしくだらむと部屋部屋にあかるく寝し人ぞ見ゆ　吉植庄亮

赤とんぼ石に嚙みつき動かぬに日向雨明るく降りこぼれたり　服部栄一

赤松の林をぬけて榛の花明るく咲ける林に入りぬ　鳥塚　連

灯あかるくくるしむ白蛾をみつつ思へば蕁麻疹のわれ面ぶき出しなり　森岡貞香

あかるく立ちならびたる太柱身をよせぬべき陰もあらぬかな　宇都野　研

明るく若やかに笑ひかける東京！プロペラから機翼から光がこぼれる　前田夕暮

秋づきて日かげあかるくなりにけり我が村の匂ひ腹ふかくすはむ　前田夕暮

あかるく ①

あかるく ①

秋の日のあかるく射せる二階家の床の掛物しろくし見ゆも　植松壽樹
秋は澄み風船かづらのたわぶくろうすら明るく黄にともるなり　坪野哲久
秋もはや樹の間あかるくなれりとぞ思ふ晨を鵯のきてをり　藤原元
あきらめを重ぬるままに今日も見るゆふべの雲の明るく晴れて　山下正次
朝靄は鉄條網のあたりよりむからへ明るく流れてゐたり　中山禮治
朝の間をあかるくさせるこの窓の冬の日ざしにもの書き急ぐ　若山牧水
朝日いま明るく照らす金網の網目の陰影が猿の瞳に映る　沼中早太郎
朝日さす冬木あかるくあたたかし人はさきくて起きゐるらんか　古泉千樫
朝まけてあかるくあがりし柿の雨裏庭におちし青葉をいくつ　高木一夫
安房の国夏の夕はことさらにあかるく暮るる渚を思ふ　近藤元
相別れはるけくゆくに君の顔あかるくありてわびしかりけり　石川まき子
天つ日のあかるくさしてくる方に対きて嘶く濡れたる馬は　生方たつゑ

雨脚の明るくなれる伊豆の海朝さぶしく船来りけり　渡辺浮美竹
雨あとの滴たれつつ庭竹のみどり明るく夕づきにけり　松田常憲
雨過ぎし暗き谷間に木の葉みな明るく光りしばし雫す　対馬完治
雨ながら明るく暮るる茅山の茅は芽ぶけりところどころに　野村歩
雨はれてあかるくなりしもみぢ葉を見とほしにして吾等行きつも　斎藤茂吉
雨や降るといそぎて来れば咲く桜護国寺前を明るくしたり　窪田空穂
アララギのしげり鋏めば庭の上あかるくなりて湖下に見ゆ　久保田不二子
青空を雲ゆくなべに身のめぐり暗く明　くゆらぐ若葉を　古泉千樫
青菜積む舟ひとつゆく内湖は短日の風明るく寒し　木俣修
吾を待ちて寝入りしと思ふ孀の部屋に灯影明るくふけ沈みたり　加納暁
蒼松のしげる木立のをちこちに桜ほのぼのと明るく咲けり　中村憲吉
青若葉かさなる隙ゆこぼれくる真日はあかるくしたしきものを　広瀬照太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あかるく ①

生きて来しことさへときに訝しむ折々ありて明るく振舞ふ　石川まき子

池水のあかるく照れる冬の日に林泉の木立は清くおもほゆ　佐藤佐太郎

苺の匂する紅溶きてゐる明るくならむ優しくならむ君の言ふやうに　三国玲子

いちめんに花揺するがに日向風あかるく立ちてわれも吹かるる　酒井広治

いつしかに冬さりぬれば深谷の夜空あかるくおほにうつろふ　前田夕暮

一ぽんの百日紅の幹はだかに立ち明るく照れり庭土のくぼみ　島木赤彦

いつ吾れの明るく生くる日に会はん望み得べくもなきのぞみなり　結城牧秋

岩つつじ岨に明るく咲くほとり蒟蒻畑へかよふ径あり　依田秋圃

家々のともしき夕餉をはりしやあかるく暗くやけ野の灯火　片山広子

家うちまであかるくなりて夕空に虹は大きくかかりたるかな　西本郷栄

妹の手がみの文字をまれに見て心あかるくさびしめるかな　土岐善麿

うす白くのびたる杉の土用芽がけふの心を明るくしたり　長谷川銀作

うづたかき堆肥の匂ひうら悲し春日あかるくしぬび堪へずも　古泉千樫

海に向く小学校の二階窓入日に燒けて明るく赤し　本多シズヱ

海の底あかるくたのし蛸つきのもてる眼鏡をわれものぞくに　茅野雅子

裏堀は日ざし明るくなりにけり障子の外の水棹の音　布川彦二

植込の落葉はすでに乏しくて庭のすみまで明るくなりぬ　川久保俊一

雲海のみだれはじめて朝影に明るくなりし丹沢の山　松村英一

映画終りて明るくなりし一隅にうらぶれしごとわが影はあり　大場寅郎

枝おろしあかるくなれる六月の庭に向ひて朝餉を食せり　藤森朋夫

縁側にあかるく坐り吾が見るや夕日の庭の芍藥の花　川田順

縁先のおしろい花のかずかずの明るくにほふ月夜なりけり　榊原たづ

豌豆の生ふる坂道を下りたるに砂利多くしてあかるくなりぬ　三谷渉

落葉して明るく立てる太樹々にをがせの綠みゆるさやけし　佐藤佐太郎

あかるく ①

あかるく ①

音立てて空あかるくす揚花火子供の頃になりて見てをり　津端　修

おのづから眠り足らひしわが目見に村は明るく匿すところなし　古泉千樫

大更村かりの住居の終の夜を明るくせむと灯はかかげつつ　菊池知勇

お壕べの土手の草はも霜枯れて夕日明るく照りにけるかも　中村美穂

面わかき露仏ゐたまふ寺庭は明るくみえてやがて寂しき　福田榮一

かがりたくさくらのはやし俄にもあかるくなりて日はくれにけり　小出粲

かくばかり呀えしおもわを見しことなし心あかるくさびしくゐるも　五島茂

崖の上の繁葉あかるくそよぎつつ曇りしづけき秋蟬の声　松田常憲

火山島を沖合にしてこの磯の松原の松あかるく青し　川田順

風出でて揉みに揉まるる緋ざくらの向う洋館を明るく見せぬ　水谷静子

門柳あかるく透きて広池の向うをとほる汽車あらは見ゆ　中村憲吉

金絲鳥のよくなく日なり小春日の空はあかるくほほえむ日なり　田波御白

河につづく刈田明るく晴れし朝かはせみの影澄みつつ飛べり　大橋松平

楓若葉明るく蔽ふ垣の外とほりゆく人の帶のあたりみゆ　稲森宗太郎

髪結婦をつとめて明るくなりし妻胸に綠のブローチをさす　伊藤保

烏瓜ま赤にうれし眞昼山明るくあれば寂しくはなし　中村美穂

からた　の籬の若芽のびたちて窓べあかるくなりたり今日は　岩淵要

からまつの林の芽ぶきひといろに襲ふ光は明るくかなし　大内規夫

柑橘のあかるく熟れし奥庭は雨ながらひる戸を鎖したり　中村憲吉

汽車が走れば虹もまた走るどこまでも初秋のさびしさを明るく匂はせ　矢代東村

きのふかも絲瓜の柵をとり毀ちあかるくなりし吾家に子はゐる　田中義行

きのふけふ庭師済ませし木の空の明るくひろく霜月に入る　荒井信太郎

霧ながら明るく濡れし馬柵の戸を鎖して入ればらか　松山　中村憲吉

霧晴れて既に朝光させる街空電車あかるく揺れ揺れ通るも　宇都野研

あかるく　①

あかるく ①

草刈りて明るくなりし前の原殘りし椰子の晴ればれそよぐも　築地藤子

草の家に柿をおくべき所なし緣に盛りあげて明るく思ほゆ　島木赤彦

草深野眼にはあかるく動けども日中の風は音たてぬかも　八田勝一

くだりくる磯山みちに我がかげをあかるく引きて月照り渡る　氏家信

国の秀の四方のはてはてに初夏の層雲（きりぐも）あかるく屯せるも見き　宇都野研

國原はあかるく見えて低山のはたての阿蘇の山に月のぼる　伊藤保

雲切れて陽の射せるとき枕辺の硝子の棧が明るく見えつ　鈴木數吉

くもりながらあかるく思ほゆ大川にさか浪立つるみむなみの風　平福百穂

グライダーがとぶ涯しない緑草地帶があかるくあかるく展開する　前田夕暮

栗の花散りてしづけししばらくは真昼の小雨あかるく霽れて　中山雅吉

くれなゐの崩るる花に雨あかるく尙遠く立つ麦の上の靄　小暮政次

鷄頭の朱の真盛りの一本立ち明るく暮るるかはたれの庭　森本治吉

月給を持ちてかへれば我が家も少し明るくなる如きかな　安成二郎

血便のとまりし吾子のねながらに楽しむラヂオ明るくひびく　藤川忠治

けはひして心明るくなりにけり癒えぬ病とおもほえなくに　大春子

光線のごとく明るくこまやかにこころ衰へ人を厭へり　若山牧水

黄梅の花に明るく降る雨を折々障子の孔よりのぞく　若林牧春

五月の青樫の若葉がひときはこの村をあかるくする朝風！　前田夕暮

五月の日あかるく照れり村人らみな田に出でてはたらくらしも　古泉千樫

苔むせるみ祖（おや）の墓に松の葉をこぼして風の明るく過ぎつ　村野次郎

ここにして故郷（おも）もふおぼつかなゆふかた街をあかるく行くも　金子不泣

児とうつす柱鏡に夏草の花も明るくゆれつつうつれり　松井富美子

この朝やみどりあかるくゆれつつありのびにのびたる樫のわか芽は　土岐善麿

木（こ）のもとを明るくなせるおほでまり甕にし挿せばこの室に照りぬ　宇都野研

あかるく　①

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com